

降つたときには雨天とはいはないのである。

○春 雨

花曇りの時節には雨の降ることも多い。これは地方的の小低氣壓が頻繁に起るためで、恰も梅雨期の降雨が支那揚子江沿岸地方に發生せる低氣壓の續出して本邦を襲來するに起因すると同様であるらしい。

兎に角春雨が土地を濕し太陽は地上を照すので地上の草木は新芽を伸し種子は盛に發芽する。春秋の所謂春喜氣也故生の好季節である。

○陽 炎

春の長閑なる日にチラ／＼と空中に立上りて見ゆる氣で亦春の一特色をなす。熱せられて立上る空氣に光線が反射し、吾人の目に入るから起る現象である。冬の日、熱せるストロブの上方を見るとチラ／＼立上る陽炎があり。夏の日焼けたる屋根瓦の上を見ると亦この陽炎が立上る。しかし春の陽炎は春の陽氣と共に人心を長閑に靜穩になすもので何ともいへぬ風情のあること勿論である。

二、引き潮の跡

東京女子高等
師範學校助教授

平 島 權 藏

四月は一年の中で最もよく潮の干る時で在り、また干て居る時間も長いので在ります。殊に本年の四

月五月は共に丁度一日が朔日潮で十五日が望月、月の潮に當り此兩日は大凡午前十一時頃が干底になります。其から後は一日毎に五十分間程づゝ後れ又は是より前は毎一日に約五十分間位づゝ早い割になります。で四月三日の神武天皇祭などは申分のない潮干狩の日で在ります。此の日は場所にも依りますが外海では大抵午後一時頃が干底で常には干潮でも水中に隠れて見られない岩や海底までが現はれて來ます。斯うした引き潮の跡を見ますと砂上にはヒトデやウニなどの殻も轉がつて居りますがカニのいろいろインギンチャクなどは何所の海岸でも必ず見られます。砂の上に手を一ぱいに擴げて居るインギンチャクを指でつゝきますと水を薄の穂の様に吹き上げて美しい噴水が出来る。と同時にぎら／＼と指先にご感じます。是は其觸手に在る刺胞といふもので刺すので小さな動物は是に刺されると死んで仕舞ます。が我々の指は皮が厚いので唯ざら／＼と感ずる位の事です。又水が薄の様に出来るのは眞中の口各觸手の先きに在る孔から體腔中の水を吹き出すからです。

イソギンチャクを少し大きな金魚鉢か水槽に海水で飼つて置くと随分長く生きて居ます。現に私の所には四五年も飼つて在るのが居ます。是には岩に着いて居る眞赤な**ウメボシ**といふ種類か又は美しい緑の斑點の在る種類が飼ひ易くて宜しい。岩から離す時には十分に注意して體の何所にも少しの傷を負はさぬ様に。其れには岩に附着し居る工合で取り離し易いか否かを注意して、先づ第一に取離すのに都合のよいのを見出すのが肝要であります。其を一つか二つ（餘り慾張つて澤山に一つ器に入れると死んで仕舞ます）水の四五合も入る器に入れて持歸る。此時は密封しても一日や二日は大丈夫差支在りません。食物は一ヶ月か二ヶ月目に一度位アサリハマグリの肉を小さく切つて口に入れてやると宜しい。然し食物を與へるときつと翌日は水が濁る、其所で三日目位に水を取り換へます。水は海水でなければなら

いので海に遠い所では少し厄介です。しかし貳ヶ月に一度位取換へれば済むので一斗も取つて来て置けば一年位は辨じませう。外海の清み切つた水なれば永く置ても濁る様はありません。

海水を濾さなければ微生物の腐敗の爲めに濁るといひますが、外海で岸から少し離れた塵埃の無い所を汲み取つて置く^こと決して濾したりなぞする必要はない様です。水を取換ふる時インギンチャクが鉢に附着して居るのを剥がさぬ様にせねば弱ります。

インギンチャクとヤドカリの共棲の御話は随分小供の喜ぶもので自然界の現象の中では面白いもの一つです。然し是の大きいのは深い海で無いと居りませす飼つて置くにも大きな場所が必要ですが、豆粒の様な小さなインギンチャクと小さな貝殻を背負ふたヤドカリとの共棲して居るのは東京灣にも澤山居ります。特に稻毛の海岸で無數に居るのを見ました。是などは體が小さいので水の一合も容るゝ屢の中ならば長く飼つて置けます。

序に申すが飼養の容器は其動物の大小と活動の如何によつて違ひます。即ち大きな動物は大きな器に小さなものは小さく宜しい。然し同大さのものでも其運動の活潑なものは割合に大きい器の必要があります。のみならず非常に活動の烈しいものでは断へず水の轉換又は空気を送り込む必要が起ります。空気を送り込むのは大仕掛の時は空気をタンクに溜て置いて細い管で送るので在ります。が金魚鉢位の大きさの場合にはスポイドかスプレーの様なものを送り込めば澤山です。管は成る可く水の底近く挿入し其先に海綿又は孔の多い木炭を挟んで置く。すると空気は非常に細かい泡と成つて吹き出されよく水に混じます。是は水族館などでよく御覽になりませう。

此共棲のインギンチャクが觸手を擴げたものは實に美事で體に緑や赤の縞が在ります。

江の島の岩屋道の下の廣い岩の周圍が大潮には一間の餘も水面に顯はれる。其引き潮の跡には海藻や種々の動物やらで二時間や三時間の潮干の間には逆も見盡されぬ程の種類が在ります。其中にヤギと

いふ珊瑚の一種で眞紅のや橙黄の美しい色をしたものが在ります。若し見えなければ潜りに少しの金をやると幾何でも取つて來ます。漁師仲間では是を龍宮の松といひます。岩上の溜り水の中に入れて置くと無數の黄色のポリブが開いて丸で美しい花の咲いた様です。其花瓣に似た八本の觸手を蟲眼鏡で見ると鳥の羽の様に左右に枝が出て一層美しく見られます。動物學の進歩しない時代には是を植物だと思ふて居たのも無理では在りません。裝飾品として珍重する、**モイロサンゴ**、**アカサンゴ**などの珊瑚蟲即ち**ホリブ**の觸手も此通りです。是も小さな壘に入れて持歸ると一日や二日は生きて居ます。初の内は觸ると觸手を引込ませますが後には如何に強く觸つても平氣で居る様になります。此時にアルコールに漬けると觸手が開いた儘に固まつて美しい標本が出來ます。

其外、岩の表面を注視すると初めの程は唯の岩とばかり思ふたものが、なか／＼どうして實に思ひかけぬ所に種々の生物を見出さるゝものであります。季節が違ひますが秋の山を歌つた、かの

心止めて見ればこそあれ秋の山

すゝきにまじる花のいろ／＼

といふのと同じ心でせう。岩の割れ目の所に集つて居る**カメノテ**といふのは、爪の集つた様な殻で體を圍み短い肉質の柄の表面は丁度龜の手の様に小さな鱗片を持つて居ります。又同じ様なので殻が薄く柄は鱗片の無い柔かな肉質のもので**エボシガヒ**といふのが在ります。然し是は岩には附着せず浮き木の下面などに着して流れて居るもので波の爲めに岸に打上げられて居るのを拾ひとる事があります。同じ類で岩の表面に壺を伏せた様な**フチツボ**といふのがあります。以上の三種は共に水の中では長い蔓の様な脚を澤山に出して食物となる動物を押へて口に運ぶのが見られます。巻貝の類も澤山岩について居りま

す。白に青黒の斑の在る**アマオブネ**、是は貝殻の内側に三分の一ほど小舟の舳にある板棚の様なのがあります。其からサザエの様で極めて小さな**タマキビ**、是は掃き集める程に澤山でそして一つ所に集つて居ります其集つた所を見れば此動物と光線との關係は自から解釋が出來ます。**ヨメガサラ**と云ふのがあります、どうしてこんな名前をつけたか兎に角、皿としては使へませぬ、皿の底が尖がつて据りが悪いこの**ヨメガサラ**の中にもまたいろ／＼の種類が含まれて居ます。殻が薄くて細かい斑のあるのが**ヨメガカサ**。貝の表面に鵜の脚の趾の様に見へる筋が高く出て居るのが**ウノアシ**、又同じ筋が澤山にある**キクノハナガヒ**、是に能く似て少しく大きく貝の縁に出入のある**ツタノハ**などいふのは多く其形から名づけたけもので、何れも**ヨメガサラ**といはれて居る。また私は嘗て江の島の岩屋の入口の近くで**イトカゲガヒ**といふ、眞白の小さな長い巻貝に縦に絲をかけた様になつたものを生きたまゝ捕つた事もあります。生きたと申せば**寶貝**の類は皆磨いた様に美しい光澤が在ります。是は決して磨いたのではなく生きて居るものが皆あの通りの光澤を持つて居ます。なせ此貝は**アハビ**や**サザエ**の様には殻の外が汚くならないのかといふ事を實際に知るのには、寶貝の活きたのを探し捕つて小さな塚に入れて持ち歸り飼つて置くと貝が其譯を教へてくれます。其は巻貝の類ですからマヒ／＼の様には足を長く出して爬ふと同時に、此類では美しい外套膜を出して殻の外側を全部包み、又或時は是を縮めて殻中に引き込ませます。此様にする度に柔かな肉で靜かに貝殻の表面を拭ふのであの様に美しい艶が保たれるのであります。江の島邊で見つけるのは何時も**メタカラガヒ**といふて、鼠色地に黒蔭色の飛絲の様な模様のある寶貝としては割合に美しい小さいものであります。此目立たないといふ事が毎日／＼澤山に集る遊覧客の目から逸せられて生存を續け得らるゝ次第です。此れはまた以上述べた貝類には共通の事で岩に附着した時は餘程注意せぬ

と見つかりませぬ。序に見つかり悪いものを今二三種あげて見ますと、岩と同じ色で楕圓形をしたヒサラガヒといふのがあります。是を岩から引きはがすと直ぐ老爺の背の様に曲ります其れで、チイガセとも申します。其背の方には八枚の骨板が縦に并んで其周圍には肉質の様な突起が澤山にあります。此類でケハダヒサラガヒといふのは八枚の骨板の左右に石灰質から出来た毛の塊りが辨慶の旅の衣の珠數懸の紐の様になつてゐます。又此様な毛も肉質の突起もなく、八個の骨板が肉に埋まつて僅かに其先の方だけが外から見ゆる様になつたものはケナシヒサラガヒであります。

こんなものゝ名稱を一々知るといふ事は困難の様でまた必要もないと思はれぬでもありませんが、名を聞いてまた見直すや草の花

で名も知れぬ花よりは知つた花の方が興味を感じ又折角名を知つて居ても實物と出合はなければ面白は少ないものです。其れ故に名前を知るも宜しいが實物に接するが猶更必要な事せう。然し此事は餘り大袈裟に考へると手がつきませぬから、時に臨み折に觸れて一つでも二つでも理解して母親なり先生なりが先づ自ら段々と自然界に近づきになり、子供達もしらすゝ興味をおこす様になれば結構せう。

三、春の雜草

東京女子高等
師範學校教諭

竹 島 茂 郎

「いそがしや莖を摘めばつくつくし」と千代女が咏んだ様に、春の野邊は誠に感興の深いものであります。彼の山邊赤人の「春の野の莖つみにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」と云ふ歌心は、此